

伝教大師最澄と大宰府

今回は平安時代の高僧最澄について、その大宰府との関わりを中心に述べてみましょう。

最澄（767～822年）は諡号（しごう）を伝教大師といい、いうまでもなく日本天台宗の祖として有名です。彼は延暦23年（804年）7月に派遣された遣唐使に入唐還学生として随行しています。彼の伝記のひとつである『叡山大師伝』に

は、「延暦二十二年潤十月二十三日、大宰府竈門山寺にて、四船の平達の為に檀像薬師仏四軀を敬造す」とあつて、その前年に大宰府竈門山寺において、遣唐使船渡海の平安を祈って薬師仏四体を造像しています。ここには大宰府竈門山寺という寺名がみえます。これは大宰府政庁跡の北東に位置する竈門山（宝満山）にあった竈門神社の神宮寺のことです。現在の竈門神社下宮参道の南にある大型の礎石建物はこの竈門山寺に関わると考えられています。しかし、この記事よりも少し遅れて平安後期のものです。ただ、平成22年の発掘調査の際に、この近くでおそらく平安初期の寺跡とされる遺構も確認されています。

また、石清水文書に収められている承平7年10月4日付大宰府牒には

六所宝塔建立の記載がありますが、これは伝教大師最澄の「弘仁八年遺記」によるものとあります。さらに、

この府牒によれば「就中、竈門山分塔は、沙弥證覚在俗の日、去る承平三年を以て、造立すること已に成りぬ」ともあり、六所宝塔のうちの1基が筑前竈門山の地に、承平3年（934年）に造立されたことが知られます。

大宰府人物志

資料室だより ⑧

この記録についても関連があるのではないかとされる遺構が確認されています。平成20年（2008年）に実施された宝満山遺跡34次調査地点は、「本谷礎石群」あるいは「妙見礎石群」の名です。すでに知られていた遺跡ですが、発掘調査の結果、三間四方の礎石建物が想定されることが分かりました。また、年代的にも9世紀から10世紀のものともみられ、先の記録とも合致することから、これが六所宝塔のひとつではないか、とも推測されています。この遺跡からは金銅製の小型仏像も出土しており、宝満山では3例目の仏像の出土となります。このように、文献史料と発掘調査の成果をすり合わせていくことが今後重要だと考えています。